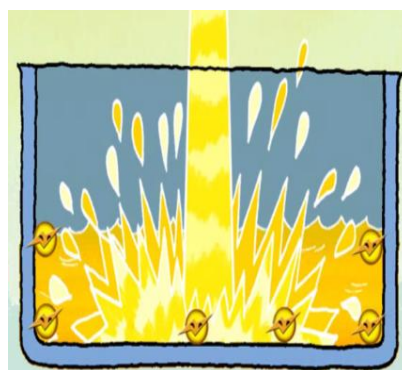
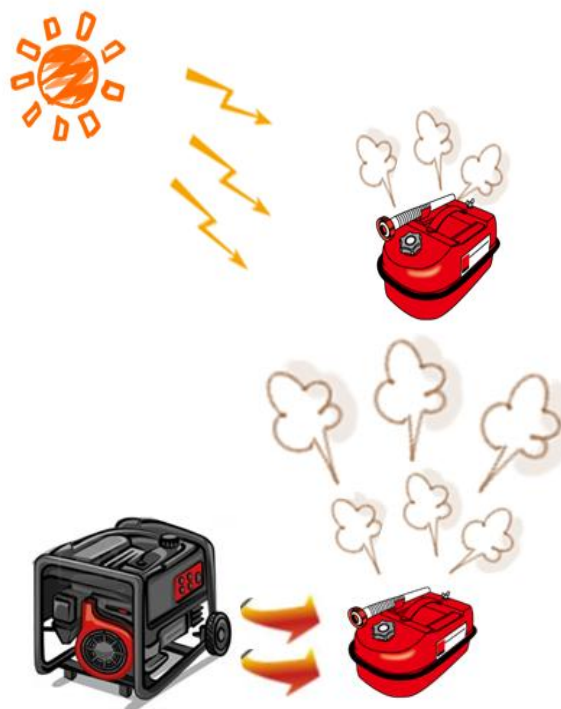


- 引火点は -40°C 程度と低く、静電気等の小さな火花でも引火する危険がある。
- 揮発しやすく、その蒸気は空気より約3倍から4倍重いので、低い場所に溜まりやすい。
- 容器を激しく揺らす等、流動の際に発生した静電気が蓄積されやすい。



京都府福知山市の花火大会火災事故による消防研究センターの実験

- 夏季にガソリン携行缶を直射日光の当たる場所に置いた場合、携行缶内の液温は約 55°C まで上昇するとともに携行缶内圧も上昇し、その状態で携行缶の蓋等を開放するとガソリン内部に気泡が発生し、大量の可燃性蒸気が携行缶外に排出される。
- さらに発電機の排気口近くにガソリン携行缶を置いた実験では、携行缶内の液温は約 90°C まで上昇し、その状態で蓋等を開放すると激しい突沸現象が起きて、大量のガソリンが開口部から噴き出す危険性が高い。





次のようなことに注意しよう！

1. ガソリン携行缶は、直射日光の当たる場所や高温の場所に置かないこと

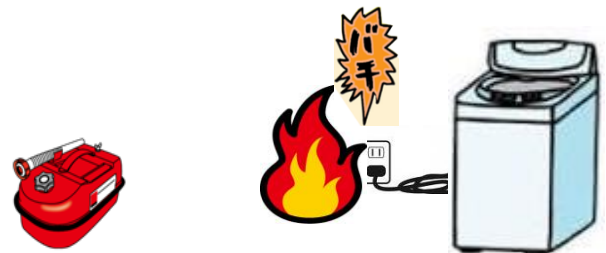
- 高温部から離れた直射日光の当たらない日陰等の風通しの良い場所に置くこと。
- ガソリン携行缶から可燃性の蒸気が流出しないようにしっかりとエア抜きや栓（フタ）を確実に締めること。

2. ガソリン携行缶を取扱う周囲の安全確認とエンジン停止を徹底すること

- ガソリンを取扱っている周辺で、火気や火花を発生する機械器具等を使用しないこと。
- 発電機に注油する際は、必ず発電機を停止させてから行うこと。

（事件事例）

ガソリンを取扱っている場所から離れた場所に置かれた洗濯機で火災に至った場合や、火気や火花がなくても、人体に蓄積された静電気で火災に至った事例もある。



静電気による着火を防止するためには、消防法に適合した金属製の容器等で貯蔵し、地面に直接置くなどして静電気の蓄積を防ぐこと。

※ 樹脂製の容器には絶対に入れないで下さい。



3. ガソリン携行缶の蓋を開ける前に、エア抜きを行うこと

取扱いの際には容器に設けられている圧力調整弁（エア抜き）等で少しずつ減圧作業を行い取扱説明書等に従って適正に行うこと。※ ガソリン携行缶の外側が熱かったり、フタが固く開けにくい場合は、内部が高圧になっている可能性があります。無理にフタの開放や減圧もしてはいけません。直ちに携行缶を人がいない日陰の風通しが良い場所に移動させて、ガソリン温度が常温程度まで下がる6時間程度はおいた後に、ゆっくりとエア抜きをしましょう。

